

國學院大學學術情報リポジトリ

昔話「化物問答」に見る妖怪の名づけと名のり

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-02-24 キーワード (Ja): 昔話, 妖怪, 名づけ, 名のり, 社交 キーワード (En): 作成者: 伊藤, 龍平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000047

昔話「化物問答」に見る妖怪の名づけと名のり

Naming and Saying own name of monster in folktale “Bakemono Mondou”

伊藤龍平

キーワード：昔話 妖怪 名づけ 名のり 社交

关键词：传说 妖怪 命名 自称 社交

要旨

昔話「化物問答」は、無住の寺を訪れた主人公が、漢字の音訓を読み換えることによって、妖怪たちの正体を次々と言い当てて、退治するという内容である。謎かけモチーフを含む妖怪退治譚は世界的に見られるが、本話の場合は、漢字の読みの音訓の問題が鍵になっている点が日本の特徴として指摘できる。この昔話における妖怪たちは、相手の妖怪の名前を確認しつつ、みずから自分の名前を名のる。他の民間伝承の中の妖怪たちが、人間によって名づけられているのとは対照的である。柳田國男が提唱して以来、命名は、口承文芸研究の一分野である。田中宣一は、命名を「名づけ」と「名のり」に分類して、民俗社会における心意を考察した。本稿では、妖怪の名前を手がかりに、民俗的発想法について考えてみた。また、論の過程で、妖怪同士の社交という点も指摘した。

摘要

传说〈妖怪的问答〉(化物問答:ばけものもんどう)是描写一个到无人寺的主角,把汉字换成日文的「音读」,一个接一个地猜对对方的名字、识破其真面目击退妖怪的故事。虽然以猜谜为主题击败妖怪的传说故事在世界上均可见,但该故事是以日文汉字的「音读」为关键,这就可视是日本的特色。故事中的妖怪,一边被对方确认名字,一边报上自己的名字,这一点是与其他传说故事被人取名的妖怪成对比的。自柳田国男提倡以来,命名是口传文学研究的一项领域。田中宣一则是将命名分类为「取名」(被取名)与「自称」(自取名)而考察了民俗社会的情谊。本稿以妖怪的名称为线索,试论民俗性的思考法,并在论述过程中也提及妖怪之间的社交问题。

はじめに——文字偏重の時代の話——

昔話「化物問答」のプロットを『日本昔話大成』から引用すれば、次のようになる⁽¹⁾。——「旅人が古屋に泊まると、化け物が出てきて謎言葉(北山の白狐・南池の鯉魚・東谷の三足の馬・西竹林の一足の鶏など)というのをいいあてる。以後、

化け物は出なくなる。」

舞台となるのは無住の荒れ寺が多く、主人公の旅人は僧侶や武士が多い。また、昔話ではなく、寺院の開基伝説として語られることもある。類話に「宝化物」「化物寺」「蟹問答」があり、これらの話型を「山寺の怪」と総称することもある⁽²⁾。

この話型については、以前、識字率の問題から論じたことがある⁽³⁾。主人公が妖怪の正体を言い当てる際に、漢字の音訓の読み換えをもってしている点に注目したのである。例えば、「サイチクリンノイツソクケイ」という妖怪は「西竹林の一足鶏」すなわち「西の竹林に棲む一本足の鶏」が正体である。外国語に翻訳するのは難しい謎である⁽⁴⁾。

この謎を解くには、相応の識字能力が必要である。だから、柳田國男は「文字偏重の時代の話」と呼んだ⁽⁵⁾。主人公に僧侶や武士といった知識人層が宛てられるのもそれ故である⁽⁶⁾。聞き手の年齢を選ぶ話だといえよう。また、識字率の高い社会では妖怪たちの正体はすぐに見破られてしまうので、話が成り立たない。識字社会と非識字社会のあわいに生じた話だと言ってよい。

二〇二一年の東アジア文化研究学術シンポジウムでも、以上の問題意識に基づいて発表をしたが⁽⁷⁾、本稿では視点を変え、「化物問答」の妖怪の名前に着目してみたい。妖怪伝承の生成に際して、名前は重要なポイントだからである。私は、妖怪とは身体感覚の違和感のメタファーだと捉えている⁽⁸⁾。少なくとも、民間伝承として話されていた妖怪の多くはこの定義で掬い取れる。生活の中で感じた違和感に名前がつけられ、それが共同体の中で共有されて伝承されていく過程で、妖怪は生まれる。民俗学では妖怪を心意伝承の一類として捉えているが、実は、言語芸術のほうに寄っている。命名は口承文芸の一分野である⁽⁹⁾。妖怪の名前を手がかりに、民俗的発想法について考えてみたい。

一、妖怪たちの社交

【表】は『日本昔話大成』所収の「化物問答」の例から、妖怪たちの名前を、話の中での登場順にまとめたものである。妖怪の名前が出てこない話や、謎かけのモチーフがない話は省略した。時間的な制約があり『日本昔話通観』の事例に当たれなかったが、凡その傾向は掴めているはずである。表示した妖怪数は二五四体

に上る。

「化物問答」の妖怪たちは大きく動物系と器物系に分けられるが、いずれも東西南北の各方角から荒れ寺を目指してやって来る。そして名前の一部に方角が含まれているケースが多い。全二五四体の妖怪のうち、一六六体に東西南北の方角のいずれかが名前に入っている。ちなみに、東西南北が揃っているのは四一例ある。妖怪の名前は、例えば、トウゲンノバズ（東原の馬頭）、サイチクリンノイッソクケイ（西竹林の一足鶏）、ナンチノリギョ（南池の鯉魚）、ホクザンノビヤッコ（北山の白狐）……等々である。荒れ寺に主人の妖怪がいることもあって、その場合はテイテイコボシ（丁丁小法師）という名の場合が多い。このうち、テイテイコボシのみが謎解きの論理が異なっている。テイテイコボシの正体は椿で作った槌だが、これは木槌の形態が漢字の「丁」に似ていることに因っている。他の妖怪のような音訓の問題ではない。コボシは「小法師」のことだとされる。槌が呪具であるのは、打ち出の小槌や産育習俗で用いられる槌などの例から証される。

文献に記録された「化物問答」でも、東西南北から妖怪が現われるのは共通しており、この趣向の古さが窺える⁽¹⁰⁾。参考に、目についた例から妖怪たちの名前を列挙する（登場順。謎解き前の名前の表記はカタカナに統一し、正体露見後は原文のママとした）。

『曾呂利物語』（著者不詳、一六六三年）所収「よろづのもの、年をへてはかならずばくる事」……コンカノコネン（坤家の小鯰）、ケンヤノバトウ（乾谷の馬頭）、ソンケイガサンゾク（巽溪が三足）、コンザンノキウボク（艮山の朽木）⁽¹¹⁾。『一休諸国物語』（著者不詳、一六七〇～七三年頃）所収「ばけ物の事」……トウヤノバズ（東野の馬頭）、サイチクリンのケイサンゾク（西竹林の鶏三足）、ナンチノリギョ（南池の鯉魚）⁽¹²⁾。『宿直草』（荻田安静、一六七七年）所収「廃れし寺をとりたてし僧の事」……チンボク（椿木）、トウヤノヤカン（東野の野干）、ナンチノリギョ（南池の鯉魚）、サイチクリンノイッソクノケイ（西竹林の一足の鶏）、ホクザンノコリ（北山の古狸）⁽¹³⁾。『怪談御伽話』（壺童子、一七八六年）所収「魔院会妖」……ケントウソクノケイバキン（乾道側の繫馬槿）、セイテイセイノシュネン（西堤井の朱鯰）、ナンカイタクノチフウボク（南涯沢の知風木）トウタウリンノセキキヤクケイ（東桃林の隻脚鶏）⁽¹⁴⁾

一連の事例から窺えるのは、どうやら妖怪たちにも社会があり、荒れ寺が社交

【表】 「化物問答」登場妖怪一覧

	資料集名	妖怪名1	妖怪名2
1	『ひろば』6号	ばえぼくえん	さえつぐりんのえずのけえ
2	『陸前の昔話』	げそぐり	ばいぼくえん
3	『夢買長者』	クス	ばえぼくえんのえへえ
4	『日本の民話』2 東北(一)	げそぐり	ばいぼくえん
5	『むがすむがすあつとごぬ』	ガンガラ坊	ナンスのパメエ
6	『永浦誠喜翁の昔話』	さいちくりんのこけい	ばいぼくえん
7	『雄勝町伝承夜話』第一集	テイリュウコブシ	西竹林の鶏
8	『秋田むがしこ』第二集	東の海のオンギョウサンギョウ	サイチクリンのイッソクのケイ
9	『南郷むかし』	天にまぬくありちろくはつべえ	南ちょうのたいよ
10	『丹波山麓秦野の民話』下巻	トウヤのヤコ	ホクロクリンのダイチンボウ
11	『民話 水原周辺』	でんでんこぶし	西竹林の鶏三足
12	『雪国の夜語り 越後の昔ばなし』	チンボクドン	サイチクリンノソーカーガンノケイ
13	『雪国の夜語り 越後の昔ばなし』	サイテンコボシ	トウゲンノバズ
14	『雪国の夜語り 越後の昔ばなし』	パイボクのフルヘイジ	イッソクイチガンノケイ
15	『越後の昔話』	てんねん小法師	東方の馬頭
16	『昔話 研究と資料』3	ナンゲノギョ	サイチクリンノサンゾクイチガンノケイ
17	『伝説とやま』	ナンチのリギョ	オテニコテ
18	『昔ばなし』	ソクヘイタン	西竹林のサイジョツケイ
19	『佐久口碑伝説集 北佐久篇』	サイチクリンノハツケイ	ホッコクノロウコ
20	『小県郡民譚集』	裏の大池の大鯉	竹藪の目かちの鶏
21	『恵那市史 恵那の昔ばなしとうた』	東林の馬頭	西竹林の鶏鳥
22	『旧静波村の民俗』	ヌルトテヌラン	—
23	『恵那昔話集』	ヌルトテヌラン	—
24	『しゃみしゃっさり』	ふるみ	ふるもく
25	『弥栄町昔話集』	ていていこぼし	とうようのばん
26	『弥栄町昔話集』	たいそうぶく	ぬったかぼん
27	『糸井の昔話』	しんぼく	とうほうはぼこつ
28	『北斗』35巻1号	さいちくりんのけえさんくろし	くんだんかんけい
29	『ふるさと小鴨谷』第一輯	トウザンのバズ	サイチクリンのサンゾクのケイ
30	『むかしがたり』	東方の馬頭	西竹林の鶏三足
31	『大山をめぐる昔』	テエテエコボシ	サイチクリンのサンゾクのケイ
32	『いろりばた』29号	チャセンドー	チャワンドー

※ 登場順。表記は初登場時。

妖怪名 3	妖怪名 4	妖怪名 5
げそぐり	—	—
さいちくりんのいちのけい	—	—
せえつくりんのこけえ	南方太郎	東方太郎
さいちくりんのいちのけい	—	—
セエツクリンのケエサンゾク	—	—
ぼっくり	—	—
南海の魚	北山の白狐	—
ナンスイのダイケのボウ	ホッコクのトグシのボウ	—
さいちくりんのけいそくさん	とうやのにいず	—
ナンチのり	セイチクリンのケイサンソク	—
東野の馬頭	北山の白狐	南池の鯉きゆう
バイボクシタノフルヘイジ	ナンチノリギョ	—
ナンチノタイリ	サイチクリンノケイ	ホクソウノギユウズ
コスイのタイショウのフナゴロウ	チンボクドン	—
西竹林の鶏	南池の鯉魚	北山の白狐
ホクヤノバコツ	—	—
タイソクはニソク、ショウソクロクソク、リョウガンは天に通ず	—	—
南海の大魚	北池の鯿	—
—	—	—
藪の穴の古狸	—	—
万年生きた池の亀	えんの下のデッキリ坊	—
—	—	—
—	—	—
ふるだいこん	—	—
さいちくりんのいっそくのでい	—	—
—	—	—
きたはおのこ	さいちくりんはいっそくのけちょう	—
しんぶくのでえてえこぼし	—	—
ナンスイのギョリ	ホクサンのコン	—
南池の鯉魚	北方の白狐	—
ホクヤノバコツ	ナンチノリギョ	トウヤノビヤッコ
—	—	—

	資料集名	妖怪名1	妖怪名2
33	『鳥取県関金町の昔話』	おひさしぶりの生魚	さいちくりんのけいちょうぼう
34	『大山北麓の昔話』	てえてえ小法師	東林の馬頭
35	『隠岐島前民話集』	テンテンコウシ	トウヤノバトウ
36	『昔話と伝説・中村編』	当家のバズ	小足八足大足二足
37	『島前』5	チンボク	サイチクリンのイッソクのケイ
38	『蒜山盆地の昔話』	てえてえ小法師	とうやのばず
39	『岡山県小田郡昔話集』	ていていこぼし	南池の主
40	『岡山県小田郡昔話集』	ていていこぼし	東ばの馬頭
41	『御津郡昔話集』	ていていこぼし	とうやのばず
42	『岡山県蒜山原地方言昔話集』	南池の鯉魚	いっちくりんの鶏三足
43	『岡山県蒜山原地方言昔話集』	ていていこぼし	西竹林の鶏三足
44	『岡山県蒜山原地方言昔話集』	西竹林の鶏三足	東山の馬頭
45	『岡山県蒜山原地方言昔話集』	てんでんこぼしのぶっきらぼう	とうざんばこつ
46	『芸備昔話集』	土兵木	東北のバグ
47	『庄原稿』	さいちくりんのちょう	ばやのば
48	『口和町昔話集』	ていてい小法師	東山の馬頭
49	『口和町昔話集』	ていていこぼし	東山の坊主
50	『広島県高野郷昔話集』	泉水池の鯉魚	西竹林の鶏惨死
51	『下高野昔話集』	油木	北国の老狸
52	『東瀬戸内の昔話』	ていていこぼし	とうやのばず
53	『西讃岐昔話集』	ていていこぼし	北山の白狐
54	『大分県真玉地方の昔話』	ホクガンのロウエン	サンチのリヨウ
55	『初手物語』	椿々居士	珍竹林の半足鶏
56	『宍岐島昔話集』	テンテンコボシ	チクリンノサンゾクチョウ
57	『いきがポーンとさけた』	古い徳利	一足一目の鶏
58	『いきがポーンとさけた』	とうげんのばず(東原の馬頭)	なんちのたいり(南池の大鯉)
59	『昔ばなし』	東原の馬頭	西竹林のさいじょっけい
60	『北斗』34	さいちくりんのけえさんくろし	しんぶくのでえてえこぼし
61	『東伯郡赤崎町昔話集』上	さいちくりんの鶏三足	たわらの馬頭
62	『旅と伝説』4-716	ていていこぼし	南池の鯉魚
63	『蒜山南麓地方昔話集』下	東方の白狐	西竹林の一足鶏
64	『猿の生胆』	東山のけいさんぞく	北山のびゃっこ
65	『ひだ人』5-963	北山の白狐	南池の一目の鯉
66	『土佐昔話集』	ちんほく	さいちくりんのけい三足
67	『南日本新聞』	コフェフッド	トーヤノジンス
68	『開聞むかし話』	ほくさんのどうえん	さいちくりんのずはっけい

妖怪名3	妖怪名4	妖怪名5
—	—	—
南水の魚	西竹林の一眼の鶏	—
ホクチクリンイチガンサンソクケイ	ナンチノダイリギョウ	—
南池の鯉	西竹林寺の鶏三足	—
トンヤのバコ	—	—
なんちのじゅず	北さんのびゃっこ	さいちくりんのけえさんぞく
東の馬頭	西竹林の鶏頭	—
南池のりし	西竹林の鶏頭	北山の白狐
さいちくりんのいちがんけい	なんちのぎよじよ	ちやかす
東山の馬頭	—	—
南水の鯉魚	東の馬頭いち	北ひやく白狐
南池のちい	北山の白狐	ていてい坊主
ちくりんけいさんぞく	—	—
南池の大魚	—	—
とうりのり	—	—
南池の緋鯉	西竹林のはっか	—
西竹林の鶏三足	北山の白狐	南池の緋鯉
餓死の馬頭	—	—
西竹の鶏三足	南水の鯉魚	—
さいちくりんのけいさんぞく	なんちのりぎよ	ほくざんのやこ
西竹林の三鶏	東野の牛頭	南池の鯉魚
サイチクリンのケイ	トウシュンボク	—
南池の大魚	—	—
ホッコボクノコンコン	—	—
湖水の鮒	寺の土間の横樋	ばいほくえん
さいちくりんのけい(西竹林の鶏)	ほくそうのぎゅうず(北窓の牛頭)	—
南海の大魚	北池の墓	さいてんこぼし
—	—	—
なんちの鯉	—	—
西竹林の鶏三足	北山の白狐	—
南池のちら	北野のぼんだだ	—
なんちのりぎよ	せいざんのこり	—
東谷の三足の馬	西竹林の一足鶏	年を経た茸
なんちのりぎよ	ほくざんびゃっこ	とうざんぼこつ
サイチクリンのズハツケイ	ホクサンノロウエン	ナンチノタイギョ
なんじのたいぎよ	とうやのじんず	—

場になっているらしいということである。次に、口承資料の例から、妖怪たちの登場場面の例を抜粋して引用する⁽¹⁵⁾。原文のルビは()で示した。

暫くして天井が破れるような大音と共に一人の大僧が下りて六部の後に座を占めた。六部は一生懸命に読経をつづけてると、戸外から雨戸をたたく。大僧がそれを誰何すると「俺は南池の鯉魚(りぎょ)だテイ〜コブシは在宅か」大僧は戸をあけて入れる。見ると大僧である。之も六部の後に座を占めた。又戸をたたく音がする。「俺は西竹林(さいちくりん)の鶏三足(けいさんぞく)だテイ〜コブシは在宅か」之も大僧だ、六部の後に座を占めた。すると又戸がたたく。かれる。「俺は北山(ほくざん)の白狐だテイ〜コブシは在宅か」之で四人の大僧が揃ったわけ。

この後、主人公は、妖怪たちの名前をヒントに次々と正体を言い当てて退治していく。とはいっても、口頭で話された場合には効果的な音訓の読み換えの謎も、こうして文字で表記されてしまうとすぐに答えが分かるので興覚めなことこのうえない。そのため、翻字の際に片仮名と漢字を使い分けて謎を成り立たせているケースが多い⁽¹⁶⁾。また、「化物問答」の事例の中には、謎解きに失敗しているものもある⁽¹⁷⁾。

妖怪たちはまず自分の名前を名のり、次いで相手の名前を聞く。ここでの挨拶はあくまでも妖怪同士でなされていた。そこにはどのような意味が隠されているのだろうか。

二、名づけ型妖怪と、名のり型妖怪

概観すると、「化物問答」における妖怪の名のりには二つのタイプがある。一つは妖怪同士で挨拶をする際の名のり、もう一つは妖怪から主人公への謎かけの際の名のりである。前者の場合は、主人公は偶然、妖怪同士の会話を耳にするか、あるいは妖怪が(暗闇のため)誤って主人公に挨拶をしてしまうという展開になる。後者の場合は、妖怪は挑発的に主人公に謎かけをするという展開になる。

両タイプの新旧の問題については軽々に判断を下せない。可能性として考えられるのは、類似話型の「化物寺」「宝化物」「蟹問答」が、いずれも謎解きを主眼に

置いているため、こちらが古態ではないかということである。「スフィンクスの謎」がそうであるように、謎かけをする妖怪と、知恵をもってそれに対する勇者というのは、世界的に見られるモチーフだった。ただ、たとえそうであるにしても、「化物問答」の妖怪たちが、互いに名のり合って相手を確認している点は見逃せない。

ここで連想されるのは、柳田國男の「妖怪談義」にある夕間暮れの挨拶についての記事である。柳田は「夕闇が次第に深くなると、そうだと思う人が人違いかも知れぬ、という気になる場合が随分ある」とし、挨拶は、相手が人間か妖怪かを見分けるための手段だったと説く⁽¹⁸⁾。昼は人間の領分、夜は妖怪の領分で棲み分けがなされているが、夕暮れ時は両者が行き交う危険な時間帯だった。「誰そ彼（黄昏）時」「彼は誰時」の語源である。「化物問答」の妖怪たちが現われるのは夕方よりもさらに遅い時間だと思われるが、荒れ寺という人間界と妖怪界の狭間に佇む相手に、身の確認をするのは同じ論理に因るだろう。人間にとって妖怪が怖いように、妖怪にとっても人間が怖いのだ。

以上の点を踏まえて考えると、「化物問答」に登場する妖怪たちの名前は、一般的な民間伝承の中の妖怪たちと比べて、いささか趣を異にしていることが分かる。

先に、私は「妖怪は身体感覚の違和感のメタファー」であり、「日々の生活の中で感じた幽かな違和感に名がつけられ、それが個人を越えて地域で共有され、伝承されていく過程で、妖怪は生まれる」と書いた。柳田國男「妖怪名彙」から例を採るなら、夜中に聞こえた奇妙な音に、「タタミタタキ」という名が付けられたらタタミタタキという妖怪が生まれ、「バタバタ」という名が付けられたらバタバタという妖怪が生まれる⁽¹⁹⁾。妖怪の名前は人間が便宜的に付けたものである。

そして一度、名づけから妖怪が生まれると、以降に似たような体験（夜中の怪音）をした人は「ああ、これが例のタタミタタキか」と認識するようになる。名づけがなければ聞き逃していたかもしれない奇妙な音が、名づけによって妖怪と認識されるのである⁽²⁰⁾。

「妖怪名彙」に立項された八〇種の妖怪たちの名は、すべて人間の名づけに因るものである（一項目に複数の妖怪名が挙げられているケースもあり、実数は一〇〇種を超える）。資料の収集が進んだ今日、「妖怪名彙」のわずかな事例をもって民間伝承の妖怪について喋々することはできないが、大掴みな傾向は分かる。

民間伝承の妖怪は、名づけ型である。

一方、「化物問答」の妖怪たちは、みずから名前を名のっている。【表】に挙げた妖怪たちの名前は、すべて妖怪自身の名のりによるもので、人間が名づけたものは一つもない。話の中で、妖怪たちは主人公に名前の意味を言い当てられるが、それは名づけと呼ぶべきものではない。「化物問答」の妖怪たちは名のり型であって、名づけから生成する民間伝承の一般的な妖怪とは、性質が異なるのである。

いま、妖怪を名づけ型と名のり型に分けたが、この問題について考える際、田中宣一の仕事を無視するわけにはいかない⁽²¹⁾。田中の『名づけの民俗学』は、柳田國男が提唱した命名習俗の研究の分野では、現在のところ、もっとも刺激的な研究といえる。

田中は、命名を「名づけ的命名」と「名のりの命名」に分類した。田中の言葉を借りるならば、「名づけ的命名」とは「対象の特徴のとらえ方とその表現の適切さ」による命名であり、山の名でいえば烏帽子山や冠山がそれに当る。一方、「名のりの命名」とは「対象への期待とか抱負」を込めた命名で、新興住宅地の地名に多い青葉台や希望ヶ丘とかがそれに当る。親が子につける名前も「対象への期待とか抱負」を込めた名のりの命名である。以上を踏まえたうえで、妖怪の命名方法について検討してみる。

三、視覚に訴える妖怪たち

民間伝承の妖怪名の多くは、名づけ的命名によっている。「妖怪名彙」から例を引くなら、小豆を研ぐ音を響かせるからアズキトギ、薬缶の姿をしているからヤカンヅル、脛を擦るからスネコスリ、高く伸び上がるからノビアガリ……等々、「対象の特徴のとらえ方とその表現の適切さ」に拠っている。一方、「妖怪名彙」に名のりの命名による妖怪はいない。

ひるがえって、「化物問答」の妖怪たちの名前を見るに、田中が定義する意味での名のりに因るものではない。妖怪たちの名前——例えば、トウゲンノバズ——には何らの期待も抱負も込められてはいないのである。ただ、「東原」という棲みかか「馬頭」という形態の説明を組み合わせたただけである。田中のいう分類では、名づけということになる。

田中の名づけ／名のり論には、本人が自分の意思で自分の名前を決めるケース

への言及が少ない⁽²²⁾。例えば、雅号や芸名などの例、または、何らかの理由によって戸籍上の名前を変更した例などである。自分で自分の名前を決めるとき、その命名法は必然的に名のりになる⁽²³⁾。ところが、「化物問答」の妖怪たちには、そうした自身の名前に対するこだわりは見られない。このことをどう解釈すればいいだろうか。

ここで、そもそも人間は何のために名前を付けるのか、という点に立ち返ってみよう。名前を付けるということは、平たくいえば、AとBを区別するためである。そして区別をする目的は、煎じ詰めれば世界を掌握するためである。

例えば、ここに四つ足の大型動物が二頭いる。Aには角があり、Bには鬣が生えている。Aは鈍重な性格で力が強く、田を耕すのに適している。Bは人によく懐き、足が速いので遠乗りに適している。使役獣としては優秀な二頭の動物を区別するために、Aには「牛」という名前を付け、Bには「馬」という名前を付けた。名前が付けられて両者が区別されたのは、あくまでも人間の必要に応じての措置である。

あらためて見てみると、「化物問答」の妖怪たちの名前は、人間の名づけの集合体だったことが分かる。トウゲンノバズを例にすれば、その方角を「東」と名づけ、その空間を「原」と名づけ、その動物を「馬」と名づけ、その身体部位を「頭」と名づけたのは人間である。元来「化物問答」の妖怪たちは人間の管轄下にあった。

しかし、人間が名づけた名前が、意味が取れない音の羅列に化したとき——「ヒガシノハラノウマノアタマ」が「トウゲンノバズ」になったとき——人間の管轄下から離れて妖怪化した。そして漢字の音訓から意味が判明したとき、再び妖怪たちは人間の管轄下に戻ってきた——つまり退治されたのだ。言葉が人間界の秩序を作るなら、字義が不明な言葉もどきの音の連なりは、混沌とした異類の世界の表象なのである。

もう一度、「妖怪談義」から引用する⁽²⁴⁾。能登では、獺が化けた娘は満足な挨拶ができず、「誰だ」と声をかけると「アラヤ」と、「お前はどこのもんじゃ」と声をかけると「カハイ」と、意味不明な返事をするという。美濃では、狸が人に化けると「オレダ」と言うことができず、「オネダ」と言うという。同じく土佐では人に化けた狸に「誰じゃ」と聞いても「オラ」と言えず、「ウラジャガ」と答えるという。意味の取れない発声は挨拶の不成立につながり、相手が人間ではないことを

示すのである。

いま一つ、【表】から読み取れるのは、「化物問答」の妖怪たちは、形態に対する名づけが多いということである。「妖怪名彙」の妖怪たちが、形態ではなく、行動に対しての名づけが大半を占めることを念頭に置けば、一つの特徴として提示できよう⁽²⁵⁾。「化物問答」の妖怪たちの中で、行動に対する名づけといい得るのは、22・23番のヌルトテヌラン（塗るとて塗らん）と26番のヌツカカボン（塗ったか盆）ぐらいである⁽²⁶⁾。端的にいえば、「化物問答」の妖怪たちは、視覚的である。

以前、「妖怪名彙」の妖怪たちを、五官（目・耳・鼻・舌・肌）のどこで感知しているのかを調べたことがある⁽²⁷⁾。調査以前は、聴覚で捉えられる妖怪が多いと思っていたが、予想に反して、視覚で捉えられる妖怪が多いことが分かった。民俗社会の妖怪は、人間の目に見えていたのである。ただ、視覚で捉えられる妖怪の多くが火の妖怪であり、例えば鳥山石燕の妖怪に見られるような、凝った意匠の妖怪が見えるわけではない。特徴が単純化され、細部が描かれたいのは、口承世界の妖怪の特徴でもあった。

おわりに

本稿では、昔話「化物問答」の妖怪たちの名前を、妖怪同士の社交という面に注目したうえで、これを名のり型と捉えて考察した。また、漢字の音訓の読み分けによって人間の管轄下に入る場合とそこから外れる場合があることに言及し、後者の場合に妖怪が生ずると述べた。併せて、この妖怪たちが、文字に依拠していることも指摘した⁽²⁸⁾。

この昔話の謎は、漢字を視覚的に想起して（例えば「東」）、その音訓を読み分ける（「トウ」と「ヒガシ」）という作業を通さなければ解けない。その意味で、「化物問答」とは視覚に訴える話であり、登場する妖怪たちは視覚的だといえる。

そもそも何故、身体感覚の違和感に名前を付ける（言い換えると、妖怪化させる）必要があるのだろうか。この問いに対する答えを二つ挙げてみる。一つは、違和感を覚える場所や時間帯が決まっている場合に、危険を共同体の成員で共有して注意を促す効果があることが挙げられる。危険を察知できれば、おのずと対処方法も練ることができる。いま一つは、名前を付けることによって、怪異を理解可能なものに変換させ、安心を得るといった効果があることが挙げられる。名づ

けとは、対象を人間の側に呼び寄せる行為なのである。そのようにして生まれた民間伝承の妖怪たちの中であって、統御不能になって暴走した名前から生まれた「化物問答」の妖怪たちは異色の存在と言える。

名づけという行為は、世界中のあらゆる民族で行なわれている。声と文字の葛藤も民族ごとにある。それぞれの民族に、「化物問答」と似通った過程で生成した妖怪がいるはずである。新たな比較研究の種がここに見いだせよう⁽²⁹⁾。

注

- (1) 関敬吾・野村純一・大島廣志 編『日本昔話大成』一九七八～八〇年、角川書店
- (2) 稲田浩二・小澤俊夫 編『日本昔話通観』（一九七七～九〇年、同朋舎）では「化け物問答」の話型名で採られている。『日本昔話通観 昔話タイプ・インデックス』第二八巻（一九八八年、同朋舎）の同話型の注には「秘められた名は、漢語の音読みによるもので、僧侶などの知識人がこのタイプの伝承にかかわっていたことを推測させる。民間でもこの種の関心は高かった」とある。
- (3) 伊藤龍平「「化物問答」の近世と近代——昔話とリテラシー——」國學院大學近世文学会 編『澁谷近世』第二四号、二〇一八年、國學院大學近世文学会 ※加筆修正のうえ、「「化物問答」の文字妖怪」と改題し、伊藤龍平『何かが後をついてくる』（二〇一八年、青弓社）に収録。
- (4) 鈴木満は下記論考において、中国古典にも同話型が見られることを指摘し、これを日本の「化物問答」の原型と推論している。モチーフや話型レベルではそうかもしれないが、むしろ日本の「化物問答」の胆になっているような、漢字の音訓の読み分けによる謎解きはない。鈴木満「日本民話「化け物寺」の由来——中国の源泉と日本への流入——」武蔵大学人文学会 編『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第三号、二〇〇九年、武蔵大学人文学会
- (5) 柳田國男 監修・日本放送協会 編『日本昔話名彙』一九四八年、日本放送協会
- (6) 村上健太「日本の昔話における寺——「山寺の怪」を中心に——」小澤俊夫 編『日本昔話のイメージ』一九九八年、古今社（「白百合児童文化研究センター叢書」第一巻）
- (7) 第七回・東文化研究学術シンポジウム（二〇二一年一月二〇日 於 國學院大學）での発表。当日の発表題目は「昔話「化物問答」に見るリテラシー——漢字の音訓をめぐって——」。
- (8) 身体感覚の違和感への名づけと妖怪との関連については、下記拙著の序文「妖怪の詩的創造力」で詳述した。
伊藤龍平『何かが後をついてくる』（前掲、注（3））
- (9) 柳田國男「口承文芸史考」『日本文学』第一一巻、一九三二年、岩波書店 ※のちに、柳田國男『口承文芸史考』（一九四七年、中央公論社）に収録。
- (10) 文献における「化物問答」の研究に、次の論考がある。
小林幸夫「願入坊の話芸——「化け物寺」の昔話——」『伝承文学研究』第四九号、一九九九年、三弥井書店 ※のちに、小林幸夫『しげる言の葉——遊びごろの近世説話——』（二〇〇一年、三弥井書店）に収録。
宮林奈央「「化け物寺」話型成立考」『清泉語文』第二号、二〇一〇年、清泉女子大学日本語日本文学会

岡島由佳「化物屋敷」譚の化物と話型——仮名草子・浮世草子を中心に——全国大学国文学会 編『文学・語学』第二三〇号、二〇二〇年、全国大学国文学会

- (11) 高田衛 校注『江戸怪談集』中、一九八九年、岩波書店
- (12) 朝倉治彦 編『仮名草子集成』第三卷、一九八二年、東京堂出版
- (13) 高田衛 校注『江戸怪談集』上、一九八九年、岩波書店
- (14) 伊藤龍平「翻刻『古今怪談／深雪草』」國學院大學近世文学会 編『澁谷近世』第二〇号、二〇一四年、國學院大學近世文学会
- (15) 久永興仁「寝物語にきいた昔話」『旅と伝説』第四卷第七号、一九三一年、三元社
- (16) 私自身の例を挙げると、下記資料集において「化物問答」を翻字する際に、サイチクリンノイソクケイを、初登場の場面では片仮名表記とし、謎解きの場面では漢字表記とした。他の報告者たちも、音訓の問題を解決するために工夫を凝らしている。
伊藤龍平 編『福島県田村郡／都路村説話集』二〇一五年、國學院大學説話研究会
- (17) 提示した【表】には、話者（もしくは、採話者）が謎解きに失敗したと思いき例も散見される。例えば、49番の「東山の坊主」は「バズ（馬頭）」の、68番の「ほくごんのどうえん」は「ロウエン（老猿）」の、51番の「西竹林の鶏惨死」は「ケイサンゾク（鶏三足）」のそれぞれ聞き違いと思われる。36番の「当家のバズ」は「東野の馬頭」だと思われるが、意味を理解していない。「西竹林のはっか」も意味が不明。
- (18) 柳田國男「妖怪談義」『日本評論』第一卷第三号、一九三八年 ※のちに、柳田國男「妖怪談義」（一九五六年、修道社）に収録。
- (19) もっとも、「妖怪名彙」の記述には、原資料の文章に柳田が手を加えたものが多く、注意が必要である。この点について、小松和彦は下記著作で、シズカモチとタタミタタキを例に挙げ、検討している。
小松和彦「解説」柳田國男 著・小松和彦 校注『新訂 妖怪談義』二〇一三年、角川学芸出版
- (20) 名づけと妖怪の問題については、山田巖子の下記論考が参考になる。山田は、妖怪化される以前の（正確にいえば、妖怪になる可能性を秘めた）身体感覚に名づけをされた例を掲げ、報告・考察している。
山田巖子「目の創造力／耳の創造力——語彙研究の可能性——」日本口承文芸学会 編『口承文芸研究』第二八号、二〇〇五年、日本口承文芸学会
- (21) 田中宣一『名づけの民俗学 地名・人名はどう命名されてきたか』二〇一四年、吉川弘文館
- (22) 『名づけの民俗学』（前掲、注21）でも、雅号や芸名に対する言及はあるが、問題提起に止まっている。
- (23) 自身の身体的特徴をユーモラスかつ自虐的に誇張した雅号・筆名の例は少なくない。しかし、その場合でも、他者から見られたい自分の姿を名前に込めているという点で、名のり的であるといえる。
- (24) 柳田國男「妖怪談義」（前掲、注（18））
- (25) ここで「妖怪名彙」の妖怪たちの名づけの法則にふれる余裕はないが、厳密には、行動と形態の双方に跨った名づけのケースも少なくない。例えばオクリズメという妖怪の名前は、行動（送る）と形態（雀）の双方に対する名づけから成っている。
- (26) ただし、ヌルトテヌランの場合でも、ヌツカカボンの場合でも、「塗る」「塗った」という行為の主体は人間であるので、厳密にいつて妖怪の行動とはいえない。
- (27) 伊藤龍平「妖怪はどこで感じられてきたか——水木「妖怪」の原風景——」安井真奈美、エル

- ナンデス・アルバロ 編『身体の大衆文化 描く・着る・歌う』二〇二一年、KADOKAWA
- (28) ここで「化物問答」の妖怪たちが「文字に依拠している」としたのは、妖怪としての存立自体が文字なくしては成り立たないからである。記述のレベルでいうならば、文字による名づけの例は多い。「妖怪名彙」から例を拾うと、キカ（鬼火）、イネンビ（遺念火）等がある。
- (29) 本稿で扱えなかった問題に、「化物問答」の妖怪たちがフィクション＝昔話の世界の存在であることが挙げられる。世間話や伝説などのリアルな世界の存在である他の民間伝承の妖怪たちとの相違点である。だから、本稿の【表】に示した妖怪たちは、「怪異・妖怪伝承データベース」（国際日本文化研究センター）の検索でも出てこない。両者は、口承文芸の世界での生息域が違うのである。

（資料集・書誌） ※ 番号は【表】と対応。

- 1 『ひろば』六号、伊藤正子、一九七一年、迫町公民館 〈宮城〉
- 2 『陸前の昔話』佐々木徳夫、一九七九年、三弥井書店 〈宮城〉
- 3 『夢買長者』佐々木徳夫、一九七二年、桜楓社 〈宮城〉
- 4 『日本の民話』二 東北（一）加藤瑞子、佐々木徳夫、一九八二年、ぎょうせい 〈宮城〉
- 5 『むがすむがすあつとごぬ』佐々木徳夫、一九六九年、未来社 〈宮城〉
- 6 『永浦誠喜翁の昔話』佐々木徳夫、一九七五年、日本放送出版協会 〈宮城〉
- 7 『雄勝町伝承夜話』第一集、郷土を語るつどい、一九七六年、雄勝町中央公民館 〈秋田〉
- 8 『秋田むがしこ』第二集、今村義孝・泰子、一九六八年、未来社 〈秋田〉
- 9 『南郷むかし』第二集、千葉大学日本文学研究会、一九七四年、孔版 〈福島〉
- 10 『丹波山麓泰野の民話』下巻、一九七七年、秦野市教育委員会 〈神奈川〉
- 11 『民話 水原周辺』新潟県立水原高等学校社会部、一九七一年、自刊 〈新潟〉
- 12～14 『雪国の夜語り 越後の昔ばなし』水沢謙一、一九六八年、野島出版 〈新潟〉
- 15 『越後の昔話』水沢謙一、一九七四年、日本放送出版協会 〈新潟〉
- 16 『昔話 研究と資料』三、丹野裕子「いちごさけもうした（一）」〈新潟〉
- 17 『伝説とやま』北日本放送株式会社、一九七一年、自刊 〈富山〉
- 18 『昔ばなし』伊那民俗研究会、一九三四年、信濃郷土出版社 〈長野〉
- 19 『佐久口碑伝説集 北佐久篇』佐久教育会歴史委員会、一九七八年、佐久教育会 ※ 原著は一九三四年。 〈長野〉
- 20 『小県郡民譚集』小山真夫、一九三四年、郷土研究社 〈長野〉
- 21 『恵那市史 恵那の昔ばなしとうた』恵那市編纂委員会、一九七四年、恵那市 〈岐阜〉
- 22 『旧静波村の民俗』東洋大学民俗研究会（鈴木孝司）、一九七〇年、自刊 〈岐阜〉
- 23 『恵那昔話集』大橋和華、一九七七年、岩崎美術社 〈岐阜〉
- 24 『しゃみしゃっきり』鈴木棠三・及川清次、一九七五年、未来社 〈岐阜〉
- 25～26 『弥栄町昔話集』大谷女子大学説話文学研究会、一九七二年、自刊 〈京都〉
- 27 『糸井の昔話』立命館大学古代文学研究会、一九七四年、自刊 〈兵庫〉
- 28 『北斗』三五巻一号、岐阜県女子師範学校附属国民学校北斗会、一九四一年 〈兵庫〉
- 29 『ふるさと小鴨谷』第一輯、上加茂文化協会、一九七一年 〈鳥取〉
- 30 『むかしがたり』山田てる子、一九七五年、日本写真出版 〈鳥取〉
- 31 『大山をめぐる昔』稲田和子、一九七七年、講談社 〈鳥取〉
- 32 『いろいろばた』二九号、川上勉彦、南会津山の会、一九六七年 〈鳥取〉

- 33 『鳥取県関金町の昔話』 稲田和子、一九七二年、山陽学園短期大学昔話同好会 〈鳥取〉
- 34 『大山北麓の昔話』 稲田浩二・福田晃、一九七〇年、三弥井書店 〈鳥取〉
- 35 『隠岐島前民話集』 鳥根大学昔話研究会、一九七七年、自刊 〈鳥根〉
- 36 『昔話と伝説・中村編』 村尾昌信、一九七五年、西郷町立中村中学校 〈鳥根〉
- 37 『島前』 五、一九七六年、自刊 〈鳥根〉
- 38 『蒜山盆地の昔話』 稲田浩二・福田晃、一九六八年、三弥井書店 〈岡山〉
- 39～40 『岡山県小田郡昔話集』 岡山県矢掛商業高等学校郷土研究部、一九六七年、自刊 〈岡山〉
- 41 『御津郡昔話集』 今村勝臣、一九四三年、三省堂 〈岡山〉
- 42～45 『岡山県蒜山原地方方言昔話集』 親和女子大学説話文学研究会、一九六七年、自刊 〈岡山〉
- 46 『芸備昔話集』 村岡浅夫、一九七五年、岩崎美術社 〈広島〉
- 47 『庄原稿』 山陽学園短期大学昔話同好会、一九七六～七八年 〈広島〉
- 48～49 『口和町昔話集』 大谷女子大学説話文学研究会、一九七〇年、自刊 〈広島〉
- 50 『広島県高野郷昔話集』 親和女子大学説話文学研究会、一九六九年、自刊 〈広島〉
- 51 『下高野昔話集』 親和女子大学説話文学研究会、一九八九年、自刊 〈広島〉
- 52 『東瀬戸内の昔話』 柴口成浩・仙田実・山内靖子、一九七五年、日本放送出版協会 〈香川〉
- 53 『西讃岐昔話集』 武田明、一九四一年、香川県立丸亀高等女学校郷土研究室 〈香川〉
- 54 『大分県真玉地方の昔話』 瀬戸秀樹、『昔話 研究と資料』3、昔話研究懇話会、一九七四年、三弥井書店 〈大分〉
- 55 『初手物語』 古賀幸雄・古賀ユキ・真藤アキ、一九七二年、久留米郷土研究会 〈福岡〉
- 56 『壱岐島昔話集』 山口麻太郎、一九四三年、三省堂 〈長崎〉
- 57～58 『いきがボンとさけた』 水沢謙一、一九五八年、未來社 〈新潟〉
- 59 『昔ばなし』 岩崎清美、一九三四年、信濃郷土 出版社 〈長野〉
- 60 『北斗』 三四号、池田師範学校 〈兵庫〉 ※『日本昔話大成 本格昔話 六』第七卷(一九七九年、角川書店)に拠る。
- 61 『東伯郡赤崎町昔話集』 上、大谷女子大学説話文学研究会、一九六八年、孔版 〈鳥取〉
- 62 久永興仁『寝物語にきいた昔話』『旅と伝説』第四卷第七号、一九三一年、三元社 〈鳥根〉
- 63 『蒜山南麓地方昔話集』 下、大谷女子大学昔話研究会、一九七六年
- 64 『猿の生胆—土佐の昔話—』 坂本正夫、一九七六年、桜楓社 〈高知〉
- 65 『ひだびと』 五卷、飛騨考古土俗会 〈高知〉 ※『日本昔話大成 本格昔話 六』第七卷(一九七九年、角川書店)に拠る。
- 66 『土佐昔話集』 桂井和雄、一九四八年、高知日報社 〈高知〉
- 67 『南日本新聞』 一九六一年四月二九日 〈鹿児島〉
- 68 『開聞むかし話 あったこっかなかったこっか』 長山竹生、一九七七年、自刊 〈鹿児島〉